〔費孝通先生追想特集—座談会記録〕

座談会：「費孝通理解の諸問題」

Discussion: How to Understand Professor FEI Xiaotong

司　会：周　　星（愛知大学国際コミュニケーション学部教授）
ZHOU Xing

参加者：加々美 光 行（愛知大学現代中国学部教授）
KAGAMI Mitsuyuki

河 野　　眞（愛知大学国際コミュニケーション学部教授）
KONO Shin

張　　琢（愛知大学現代中国学部教授）
ZHANG Zhuo

アジアを代表する社会学者・人類学者である費孝通先生は，多大な研究成果を残して，2005年4月24日に永眠した。鈴木規夫教授のご提言により，『文明21』第15号を「費孝通先生追想特集」として計画してきた。費孝通先生の学問を日中両国の学者が，どのように評価するのか，また，日本からみた費孝通先生の学問の意味と価値とは一体如何なるものか，という事を解明するために，国際コミュニケーション学会では，「費孝通理解の諸問題」を旨とする座談会を開催した（2005年7月29日午後，愛知大学車道校舎13階第四会議室）。

周：最近，費孝通先生がなくなったニュースは中国国内だけでなく，海外でも報道され，大きな話題になって，色々な追悼・記念活動が行われています。そして費孝通先生は，日本との関わりも深いですね。費先生の父親は日本に留学したことがありますし，お姉さんも日本に留学し，帰国後，日本で学んだ先進的な技術を呉江農村の農民に教えました。費孝通先生はその村でフィールドワークを行って，そこで収集した資料は名著『江村経済』の一部になりました。費孝通先生はその著書の中で，自らご家族と日本との関わりを紹介しました。愛知大学のICCS（COE国際中国学研究センター）は，現代中国学の構築を目

周星　愛知大学国際コミュニケーション学部教授

指していますが，私から見れば，中国本土の研究者及びその成果を重視するという印象を受けます。そうした意味で，費孝通先生はまさに中国人研究者の中で最も無視できないお一人だと思います。ですから，費孝通先生と彼の研究を日本の学界はどのように評価しているのか，まず，加々美先生にぜひ，お伺いしたいと思います。

加々美：私が中国研究に従事し始めた1967年当時は日中両国間に国交がなく，特別な人ではなければ中国に行けない状態でしたし，中国国内での社会調査はまず全く不可能な状態だったのです。それで私の東京大学在学中の専攻は社会学でしたが，社会学の手法で中国研究を行うことは難しいと判断しました。1967年は文化大革命が勃発して2年目に当たっておりましたし，日本の中国研究学界の主流は文革の影響を大変被っておりましたので，私の研究も自ずとその影響を受け文革研究への傾斜を強めた結果，日本の社会学学界から遠ざかることにもなりました。もう一つは，中国社会を学問的にどのように把握するかという問題です。日本における戦前の講座派と労農派の対立は中国社会に関する理解の面にも波及し，ご存知のように平野義太郎の見方と戒能通孝の見方，平野が講座派，戒能が労農派ですが，1930年代の中国社会に近代と前近代を分ける村落共同体があるかないかを巡る論争がありました。平野義太郎は簡単に言うと，中国の村落共同体は前資本主義的規範を帯びたものとして存在するという考え方でしたが，戒能通孝は中国農村の窮乏化によって共同体は崩壊し，むしろ都市における自由度の高いギルド共同体のようなものがかなりの程度存在しているという考え方をした。そういう考え方の対立は67年当時にもまだ存在しました。私の研究は当初，戒能の観点に近い見方からこの中国農村社会の論争について関心を持って始まったのですが，既に述べたような理由からやがて私の学問的関心は政治思想の方に向かって行きました。費孝通さんとの出会いは，私が学問的関心を転換させたのちのことでした。ご存じのように1979年の3月に，中国の社会学が復活を遂げ，その年の11月に日本の『毎日新聞』の招待で，費孝通さんが来日したのです。東京大学社会学の福武直先生と市ヶ谷のホテル・ニューオータニで会談を行いました。当時，『毎

加々美光行　愛知大学現代中国学部教授

日新聞』から私に対しこの会談に同席するよう依頼があったおかげで，ホテルの会議室で初めて費孝通さんとお会いすることが出来ました。会談が終わった後の挨拶で，費孝通さんは私に声を掛け「お若いですね。君のような人間こそがこれから日中社会学界の未来を担っていかなければなりません」と言われたのです。私は既に社会学専攻の世界から身を引いていたので，答えに窮したのですが，礼を失してはならないと言う想いから，「一生懸命やります」と答えてしまいました。その縁があったおかげです。1982年の1月だったと記憶していますが，ある日，私が勤務していた市ヶ谷本村町のアジア経済研究所の前の道でバッタリ福武直先生と出くわした折に，福武さんから「そうだ君，この3月に中国へ社会学訪問団を率いて行くのだけれど，団員として加わってくれないか」と言われ，これまた福武先生の笑顔に負けて，ひとつ返事で承諾してしまったのです。日本の社会学訪中団の第二回目の訪中でした。実は私はそれまでまだ一度も中国に行ったことがなかったのです。当時は既に日中間の国交は回復していましたが有力なコネクション，日中友好関係のコネクションを利用してミッションの一員に参加しないと，まだ中国に行けない状態でした。私は完全に自由な個人として中国に行けるようになるまで行かないという考え方を持っていましたが，福武さんに負けて訪中することになりました。その結果，中国の社会科学院で費孝通さんとの二度目の再会を果たしたわけです。当時社会学研究所の研究員がほとんど社会学専門の研究員ではなく，社会学の専門知識に欠けている状態でした。

周：その時は，文化大革命が終わったばかりで，ほとんど社会学の研究者はいなかったですね。そこで，費孝通先生は，アメリカ・日本・諸外国の研究者の力を借りて，中国の社会学を復活させようと考えたのです。

加々美：そうですね。二度目の費孝通さんとの対面後，私は「現代中国の政治社会と社会学―中国における社会学の存立可能性」という題名の相当分厚な論文を『中国研究月報』(426号，1983年8月）に発表しました。この論文執筆を通して費孝通さんに対する理解を深めるということが私にありました。まず1952年に中国の社会学研究関連機関のすべてが消されたわけです。「院系調整」というのですが，大学の学院，学部の調整が51年から始まり，52年に社会学系はすべて廃止されました。社会学はブルジョア科学だという考えから出た結果なわけです。

そうした中で費孝通さんは1950年代半ば以後，雑誌『新観察』の援助を得て江蘇省開弦弓村再訪を中心に農村調査を行いました。当時は農業高級合作社から人民公社に移行するちょうど移行期に当たるわけですが，費孝通さんはむしろ合作社の中で農村が極度に疲弊しているという事実にぶち当たるわけです。当時『人民日報』をはじめ，新聞はすべて高級合作社を大賛美する論調があったのです。その中で彼は調査の結果に基づいて高級合作社化の弊害を指摘し批判したのです。その理由は実は明確で，中国の産業近代化の柱となる重化工業化のための原始蓄積をどう行うかに関して，古典的な方法つまり農業収奪方

式を採る，それが農業集団化だったということです。合作社化に対する費孝通さんの批判は，1938年の著作『江村経済』以来の考え方，農村経済の発展こそ社会発展の根本だという見方があったからですが，さらに労働者と並んで農民こそ人民民主独裁政権の主人公であり社会主義建設の主人公だという信念も働いていたと思います。しかし事実は農村と農民がこのように疲弊している，それでよいのかという疑念が働いていたのです。

もっとも費孝通さんがそんな大胆な批判を出来たのは，1956年3月から学術言論の「百花斉放，百家争鳴」が毛沢東によって唱えられ，共産党までを批判するよう呼びかけがなされていたからでもあります。ご存じのように1957年4月から反右派批判が始まります。当然，費孝通さんは厳しい批判を受け1980年まで23年間学問活動の場から追われました。ですから私が79年に費さんと最初に出会った時，まだ正式には学問活動に復帰されていなかったわけです。私が83年にその論文を書いてしばらくして，鶴見和子さんや宇野重昭さんたちが，費孝通さんと「小城鎮」に関する研究会を組織しました。私はその研究会には参加しませんでしたけれど，鶴見さん，宇野さんを通じて費孝通さんの「小城鎮理論」などの色々な理論を知ることが出来ました。

周：確か日中合作の社会学研究でしたね。

加々美：「小城鎮理論」の核心は，社会発展の原動力を「内発的」要因に重きを置いて見る点にあります。外発的な西洋近代化モデルの要因を無視する訳ではないけれど，当該社会の独自の内発的条件というフィルターを通して，初めて外発的要因も生きてくると見るのです。そこに中国の内発的要因を重視した「小城鎮理論」が生まれてくる理由もあったのです。同じ時期，1984年頃から私の大学時代の指導教授である富永健一先生が，南開大学に招かれて3年間ほど社会学理論の紹介と社会学の人材を一から養成する仕事をしておられました。例えば，その中から育った学者の一人が現在南開大学の日本研究院院長の楊棟梁さんです。ただ富永さんが紹介したのは完全なアメリカ社会学です。T. パーソンスの行動機能分析理論，行為の理論などを中心としたものです。T. パーソンスの理論は元はマックス・ヴェーバーの理論です。ですから冨永さんは勿論ヴェーバー理論も論じたわけです。こうして中国社会学の復活には日本の社会学界からもとも福武さんのように戦前から中国の社会調査を積み上げてきたような人と，冨永さんのような理論肌の学者との両方がかかわったということになります。その間には大きな差があって，費孝通さんは福武さんの流れに近かった。いずれにせよ社会学的発想というのは，思想や政治をやっていても，常に僕の中に働いていて来たのです。

周：大変，貴重なお話を聞かせて頂き，ありがとうございます。民俗学者として費孝通先生の研究をどのように思っていらっしゃるのか，河野先生にもお伺いしたいと思います。

河野：費孝通先生の著作については，私はまったく一般読者として読む限りなのですが，大変強い印象を受けてきました。その最も大きなのは，中国とはどういう社会で，またど

河野眞　愛知大学国際コミュニケーション学部教授

ういう文化なのかが外に向かって明快に説かれたということですね。因みに，日本の場合でも日本人による日本論・日本文化論があって，そのなかには岡倉天心の『茶の本』とか新渡戸稲造の『武士道』のような英語で書かれた世界の各国語に訳されて影響の大きかった古典的なものがありますが，ちょうどそうしたものにあたる中国人による中国社会論・中国文化論というようなところがあると思います。もちろんそれをどう読むかとなると，それはそれで難しいところがあるでしょうけれど，私自身は，3つの点で強い印象を受けました。『中国農村の細密画』というタイトルの翻訳書に収められている論考は，どれもフィールドワークの方法として今も斬新なものであると思いますが，特定の対象についての個別研究でありながら，そこから一般論が引き出されるのが大変構造的であることに驚きます。またそこで説かれている中身でも，先入観を打破されるようなところがあります。先入観について言えば，アジアが対象であっても，私たちの知識は西洋の学者の古典的な理論を先ず受け入れているところがあります。たとえば，ヘーゲルやマックス・ウェーバーの中国論などです。ヘーゲルが，中国社会の特質として家族倫理が国制に拡大しているとしたのは有名です。また私たちの印象でも，中国社会の基本である家族については大家族制を想定しています。ところが費孝通先生の著作を読むと，農村では大家族ではなく，現在の家族とも変わらないような核家族に近い小家族が優勢で，それが農業経営にはむしろ合理的であったことが説かれています。また純然たる血縁よりも，農業の実態に即したさまざまな工夫が機能してきたことが，これまた『生育制度』のような研究を背景にして説かれています。そうすると，農村と大家族と血縁とを漠然と重ねあわせて中国社会を考えていた見方，それはまた西洋の古典的な中国論でもあるのですが，それが客観的な事実に即して根本的に修正されてしまいます。

二つ目は，農村社会論と対をなすと言うべきか，農村は農村だけで成り立っているわけではないのは当然で，この問題でも，中国社会の特質を的確に指摘されているように思います。つまり城と鎮で，特に小城鎮論につながってゆく農村と小城鎮とを対比的に相関させる観点ですね。さらに，城は国家を中心にしたネットワークで，行政府があり，軍隊が駐屯している。それに対して鎮は，物資の流通のために成立した自然発生的な町で，その基盤は農村にある。つまり，城は国家の支配構造につがなる町，鎮は農村を背景にした町ということになり，二種類の町を考えておられる。因みに，西洋の理論では都市と農村という基本的な対比があり，日本でもそういう捉え方が往々にして頭をもたげますが，ど

うも借り物の図式というところがある。ところが費孝通先生は，農村と小城鎮の有機的関係というように中国社会の特質を独自の術語で表現しておられる。これも凄いと思います。

第三は，中国の人と接していていつも感じることと関係するのですが，中国の人は，どうも日本人とは人間関係に対する感覚が根本的に違うような印象を受けます。それが，費孝通先生によって，これまたずばりと表現されているところがあります。術語としては日本語では分かり難いところがありますが，「差序格局」です。これは，たとえば日本人の人間関係と対比すれば分かりやすいと思います。日本人の人間関係論として原理的なものでは中根千枝先生のタテ社会論があって，それによると，日本人は自分が帰属する集団のなかで自分がどういう距離にあるのかを常に思いめぐらしている，つまり中心は自分ではなく集団にあって，その中心から自分がどれだけ近いか遠いかが気になって仕方がないということで，これは私などもなるほどと思います。それに比べて，中国の人は，と言ってもそれほど深く知っているわけではないのですが，どうも自己を中心に人間関係を考えているような印象を常々もっています。ところが費孝通先生の著作を見ると，それが論理的に表現されているのです。つまり，中国人は，誰もが自分を中心において，関係の輪というか人脈の圏というのか，ゴム毬の伸縮のようなものを頭に描いていて，それがどの程度大きいか小さいかを神経質なまでに意識しているということ，またそれは自分と特定の誰かという関係で，しかもその関係の重さは血縁や地縁とは別の種類で非常な重みをもつといったことが説かれていています。そしてそれを個人主義などとは言わずに，また事実それは個人主義とは別の原理だと思いますが，それを「差序格局」という術語でこれまた西洋の言葉ではなく，中国語にしかないような術語で言い表されている。

加々美：河野さんが指摘された自己中心主義について少し補足しますと，中根千枝の「縦社会」つまり日本人の心性と極めて対照的に，中国人の自己中心主義は強い個人主義を特徴とします。しかしそれは西欧的な個人主義と異なって，個人主義的な忠誠に裏打ちされることが多いという特質を持っているのです。つまり特定のグループや共同体への集団的忠誠よりも，むしろ個人間同士の忠誠が圧倒的に優先するということです。これは伝統的には「墨侠」の倫理に根ざすもので，伝統的中国の農村共同体が高い社会的流動性を常に持つ結果，共同体から遊離する客民を生みやすく，かつその中から個人的忠誠つまり「侠」心によって結ばれる秘密結社が誕生し易い精神風土が中国に根強くあるということ，孫文が中国社会を「一盤散沙」と形容し，毛沢東が「破私立公」を強調したのも，そうした中国の農村共同体の認識に基づいていたと言えます。費孝通さんの中国農村の共同体規範に対する認識もこの点で一致していたと思います。

周：費孝通先生の著書『郷土中国』は，最近，日本語に翻訳されました。それは1940年代の著書ですけれど，現在においても，中国社会を理解する上で基本的な書物だと思いま

す。今の中国社会は随分変わりましたが，変わらない部分もたくさんあります。それを理解する上で費孝通先生の著書を読む事は最適だと思います。実際に，台湾・香港・シンガポールなどの華人社会でも，費孝通先生の研究は高く評価されています。また費孝通先生の研究方法ですが，私の浅い理解によれば，まず，農村の郷土生活に入り込み，綿密に調査を行って，研究を行う事だと思います。

また，費孝通先生はコミュニティの大きな背景，つまりグローバルな視点に立ち，国際的環境の情勢を踏まえて具体的な研究を行います。江村でのフィールドワークは，まさにその手法です。なぜ，その時の調査が大きな成果を得たかというと，やはり大きな背景，いわゆる資本主義の世界システムの中から，中国のある小さい村を把握したからです。費孝通先生の研究テーマは，いつも大きいのですが，実際に行われた研究は非常に具体的で，実証的なものと言えます。江村での研究は，最初からその問題意識が，普通で簡単な村レベルの民族誌を書くというだけの目的ではなかったと思います。費孝通先生の民族研究もそうですが，はじめはヤオ族のコミュニティ研究，それから，徐々に「多元一体」の巨大な理論にまで発展して行くのです。もうひとつは，費孝通先生は自国を綿密に調査して研究を行い，そこから中国の伝統的な文化・思想・理念に包含されている中国人にとって分かりやすい概念を考案し，中国社会の構造と文化の変容を解明したことです。この点は，海外の学界にもよく知られています。費孝通先生の学問は，常に中国文化の文脈の中で概念と理論を立てますが，彼は欧米の学問にも精通していますね。

河野：費孝通先生の学問ということでは，これは周先生に教えていただきたいことなのですが，それは文化人類学あるいは人類学と社会学との関係です。費孝通先生は，イギリスで文化人類学のマリノフスキーについて研究を進められ，またその前には中国でもロシアのセルゲイ・シロコゴロフにつかれようですが，この人も人類学者ですね。つまりどちらもそれぞれの自国民ではなく，いわゆる自然民族を主な対象とした研究者で，またその方法も自国民や高度な文化をもつ集団にむけたものではなかったように思われます。ところが，費孝通先生は一貫して社会学ですね。その研究にはマリノフスキーの方法が取りいれられていることもよく指摘されるのですが，それはそうであるにしても，人類学と社会学という二つの学問の関係はどうであったのかということです。当時は，あまり境界がなかったのかも知れませんが，また別の面から言えば，文化人類学あるいは人類学は観察の学問で，またそういう方法論を発達させてきたと思いますが，費孝通先生の学問は時に政策提言というのか，社会のあり方をめぐる主張というのか，ある種の実践性をもっている。このあたりをどういうふうに受けよいのかという問題です。

周：これは確かに問題ですね。大学時代の費孝通先生は社会学部の学生でしたので，確かに呉文藻先生ら社会学者から大きな影響を受けました。また当時，アメリカのシガコ大学の社会学からも影響を受けました。つまり，そこで教室から離れて，現実の社会を調べる

ということを教えられました。費孝通先生自らの説明では，自分が社会学者なのか，それとも人類学者なのか，という事はたいした問題でない，とあまり気にしておられなかった。単に自分は中国の社会と文化を研究してきた学者に過ぎない，という事です。ですから，どちらかの学問分野という事より重要なのは，その問題意識ですね。費孝通先生の問題提起は，必ず「根拠」があり，それは必ず現地調査から出てくるものです。時には，その問題意識は，何れの学問分野にもそのまま当てはめられないでしょう。なぜなら，社会人類学の方法をそのまま自国の研究に使っても，明らかに足りないところがあるからです。だから社会学の方法も必要なのです。そして，彼の学問は確かに「実践性」を持っています。しかし，これは中国知識人の伝統の一つでもあります。それゆえに，かつて費孝通先生とイギリス人の人類学者リーチとの間で論争があったことは有名な話です。そこでリーチは費孝通先生の自国文化・自国研究を批判したのですが，そのことに対して，費孝通先生の答えは，「学問」というものには確かに知的遊戯や知恵の誇示といった側面もある。だが，一人の中国知識人として自分の研究は，自国の発展，いわば世の中に貢献できるか否か，という事でした。即ちこれは目的としての学問です。よって，当然の事ながら費孝通先生にとって，学問の応用性，或いは実践性などは全く問題ではなかったのです。この点は，むしろ柳田國男の「経世致用」の思想に通じるものです。

加々美：少し補足させて下さい。例えば，費孝通さんはマリノフスキーの機能主義的民族学からフィールドワークという手法を学んだ，しかしマリノフスキーには超歴史的なフロイド流心理学の援用があって，結果的に当該社会の内発的な構造要因を十分に把握しないという欠陥を持っていた。その代表作の一つ1927年の「未開社会における性と抑圧」はその典型例です。費孝通さんは，ある意味このようなマリノフスキーの長所を取って短所を捨てて，自己の理論枠組を形成したと僕は考えています。

周：そうですね。1920年代までの小規模な社会を対象として開発された人類学の方法，その方法を，費孝通先生は自ら中国という巨大な複雑社会に使用し，社会人類学の歴史において，自社会研究という潮流を開いたとも言えます。つまり東アジアの人類学と欧米の人類学との違いは，やはり自社会研究にありますね。

河野：1920年代とか30年代だと，欧米の人類学から見れば，日本も中国も欧米以外の地域ということで一括して観察の対象というところがあったと思います。それに対して，日本も中国も，欧米の人々に分かるような種類の論理で自分達の社会や文化を説明する必要があったと思いますが，それは容易なことではなく，よほど独創的なものとならざるを得ない。その点で，今も刺激的ですし，またそういう仕事には，自分たちの文化の底力を証明したというところが感じられます。

周：張琢先生は中国の社会学に詳しいですね，張先生のお話も伺いたいと思います。

張：費孝通先生の生涯は，憂患に生まれ，艱難となり，苦労されましたが，その学問的業

張琢　愛知大学現代中国学部教授

績は非常に顕著です。私は次の二点について話したいと思います[1)]。

第一に，費孝通先生の社会学の研究，また調査研究の中心テーマは，常に中国の工業化・都市化・近代化にあったということです。それは江村経済のミクロ的調査から始まり，その後，全国の様々なタイプの地域調査研究にまで拡がって行きました。特に西部開発における遅れた民族地域の調査研究と発展的構想に対する彼の提言は，彼の調査研究テーマの脈搏であります。そしてこれは，まさに中国が改革開放以降，東から西へ移っていった事と合致する事でもあります。この点において，両者の方向性は一致すると言えますが，費孝通先生の視点は先見的であります。実際に，彼は常に国家の発展戦略の先を歩んでいました。例を挙げれば，改革開放以降，彼は再び故郷の江蘇省に戻り，「小城鎮」の調査研究を行い，同時に農村調査も行い，その中で彼は特に農村の工業問題を研究しました。また改革開放以降，中国の社会学は復活しましたが，最初に取り掛かったのも費孝通先生でした。

費孝通先生には，『小城鎮，大問題』という有名な著書があります。そこで彼は「小城鎮」を都市と農村の結合部にする，またそこを郷鎮企業の拠りどころにもする，と書いています。つまり「小城鎮」は国家の発展戦略を転換させ得る，と彼は考えた訳です。こうした彼の学術上の研究成果と提言は，政府からも重視されました。よって彼の研究は学術的価値が高いのみならず，さらに中国近代化の発展にも学術的な支柱を提供したと言えるのです。

近年，中国ではさらなる発展には都市と農村を協調させなければならない，という見地から，都市と農村の一体化・ネットワーク化を推進していますが，これらはみな1980年代に費孝通先生が提起したものであります。だから，彼の研究成果が現在においても，非常に重要な現実的意義を有していると言えるのです。これは先述した彼の先見性と現実性に由来します。彼の研究は後に，西北・西南地域の甘粛や雲南にまで及び，その後の西部大開発の推進に対して，学術に基づいた有益な見解を提供しました。つまり当時における費孝通先生の問題提起には，予見性が含まれていたのです。

第二に，費孝通先生は，中国社会学の復旧と再建に貢献したことです。彼は，その指導者・組織者・実践者でした。中国の社会学は，1952年～1953年にソ連の影響を受けた「院系調整」によって廃止されました。それ以降，中国の社会学と人類学の学科は中国全土か

1）張琢先生の発言は中国語，邦訳は佐藤一樹（中国研究科博士後期・COE-ICCS-RA）。

らなくなりました。しかし，1979年から中国社会学の再建が始められ，費孝通先生は27年間断絶していた中国社会学再建のために，中国社会学会を再建し，また教学・研究機構の設立・人材養成なども精力的に行いました。そして社会学の再建には，教材をつくり上げる事も重要で，費孝通先生は『社会学概論』など社会学専門の大学教材を編纂しました。さらに中国社会学会が成立した後には『中国社会学通訊』を直ぐに創刊し，1985年にはそれを『社会調査研究』に改め，学術交流の場を提供しました。1986年には『社会学研究』を刊行しました。これらは費孝通先生の足跡でもあります。この20数年間を経て，中国の社会学は基本的に再建され，また新たな進歩も遂げています。そうした中で費孝通先生は基礎を確立し，また指導者としてその役割を果たしました。私が言いたかったのは，まさにこうした事です。

加々美：張先生は1985年に社会学研究所に配属されましたが，費孝通先生はそのときすでに北京大学社会学人類学研究所へ移られていたのでしょうか。

張：費孝通先生は1985年に北京大学へ移られましたが，85年以前において彼はこの二つの職を兼任していました。しかし，その年には社会学研究所所長を辞められました

加々美：費孝通さんは1988年の秋，香港中文大学で「中華民族の多元一体化構造」と題した有名な講演を行いました。この講演は費先生晩年の新たな理論的挑戦だったと私は思います。

周：先生のおっしゃる通りだと思います。現在の中国において「多元」を歴史的に釈明したのは費孝通先生の講演です。

張：私が承知するところでは，政府の認可を得て国策になったのは，一つに「小城鎮」の問題です。この「小城鎮」の研究が国策になったのは，胡耀邦の時代です。また「多元一体」の問題は，現在の胡錦涛政権も国策として，中華民族という大家族は多元一体のものと肯定し，調和のとれた社会を打ち立てようとしています。

加々美：私が言いたいのは，「多元一体」というこの概念は，どのように形成されたのか？という点です。つまり，ネットワークなのか，先ほど述べた調和的ネットワークなのか。

張：具体的に言えば，少数民族は漢民族から離れず，漢民族も少数民族から離れない，という事だと思います。これも中国史に通底している伝統的な思想です。

周：1990年の国家民族事務委員会主催の国際シンポジュームでは，「多元一体論」をよく討論しました。そこでは「中華民族」が果たして一つの民族なのかという事を論じました。つまり，国民国家と民族の関係という問題ですね。全体的に「多元一体」に関しては賛同を得られましたが，「中華民族」の概念に対しては若干の疑問が出されました。費孝通先生はそれらの討論を踏まえて，1996年に日本国立民族学博物館の研究会に出席した時に，書面で「多元一体」についての報告を出されました。実はそれ以前に北京大学にお

いてこの問題は何度も議論されました。費孝通先生の説明によれば，56の民族の上に「中華民族」というレベルの存在が可能である，だから中国の「民族」概念を固定して理解してはいけない，と言う事でした。ですから，多重なアイデンティティが可能なのです。アイデンティティとは，「民族認同意識」ですね。「多元一体論」が一体化をはかるという理解は恐らく誤解でしょう。「一体」というものは，あくまでも長い歴史の流れの中において，多民族間との相互の付き合いを通じて，単に皆がある程度共通する文化を持つようになったに過ぎない，ということです。

加々美：費孝通先生は農村問題から，民族問題に関心を移すようになったのはずっと前ですね。というよりほぼ二つの問題を並行的に研究していたと言ってよいように思います。

周：はい，ほぼ並行的に研究していたと思います。それは1930年代に，広西のヤオ族を調査した時において，すでにはっきりと費孝通先生は認識されていました。その問題意識は，ヤオ族の内部構造は重層的であって，いわば漢民族が少数民族の社会と文化に対してどのように関わり合ったのか，またどのような影響を受けたのか，という事でした。その後，費孝通先生はイギリスから帰国し，雲南大学と西南連合大学の教授として教鞭をとっていた時には，中国の民族は一つにならなければならない，と考えていました。しかし，一つの民族の中にも「多」がある。つまり，「一」と「多」の関係についての発想は，1939年の時点において，すでにはっきりと意識されていました。ですから，1952年に中国では社会学と人類学は廃止されたのですが，彼は引き続き新中国の民族調査と研究に関わり続けたのです。1950年代末期頃には，費孝通先生は各々の少数民族の歴史を整理し，中華民族多元一体論に近い認識を持っていたと思います。1980年代末期頃までには，中国の民族研究は55の少数民族のそれぞれの歴史・言語・概況などを著した，叢書・シリーズものが出版されました。それによって，かつて少数民族の歴史や文化を無視していた事は，かなり是正されたと言えます。ところが，個々の少数民族の歴史が孤立して，却って全体像が見え難くなった，という問題が生じました。今から見れば，むしろ費孝通先生は全体的視野に立って，そこから中国における多民族が共有する歴史を捉えようとしていたと思います。

河野：張先生にお聞きしたいですけれども，費孝通先生の教えを受けた世代になると思います。一つの問題は目下，中国の社会学界に大きな問題として，この現実にどういう問題があるのか，もう一つは，費孝通先生の方法論を皆さんが継承されてる時に，一つのものとして矛盾なく継承されているのか，それとも，日本のように幾つかの派学が分かれて，区別というか，この辺は費孝通先生の理論を受け取って，この辺をうけとって，その間に違いが出てくるのですね。そういうことがあるのかどうか，この二つの問題を教えていただければと思います。

張：第一の問題に関しては，現在の中国社会における最も現実的な問題として，いわゆる

不公平な分配の問題が挙げられます。それは様々な社会階層を含むもので，その社会格差の問題は，今後社会学が綿密に研究して解決しなければならないと思います。第二の問題に関しては，現在の中国の社会学研究者の中で，費孝通先生から直接指導を受けた人は，それほど多くないと思います。恐らく多くの人は，ほとんど間接的な影響を受けたに過ぎない人たちで，その影響度もまちまちだと思います。

加々美：派閥の問題では，費孝通さんの観点を同時代的に直接間接継承した人たちには大きな対立はなかった。現在の若い世代，むしろポスト費孝通の世代には欧米のポスト構造主義的なあるいはポストモダン的な，たとえばマーカス・バンクスなどのコンストラクチュアリズム（中文で建構主義，日文で形成主義。Banks, M. Ethnology: Anthropological Constructions, London and New York: Routledge, 1996）の流れに属する人類学の影響を受けている人々が出て来ていますが，まだ派閥を形成しているとは見えないですね。

周：そうですね。海外の影響を強く受けた人たち，また国内で教育を受けた人たちも，みな中国の様々な現実的問題をテーマにして研究を行っています。確かに，両者の間には，理論や研究方法などの面において違いがあります。しかし，それが派閥を形成する原因になっているとは思えないですね。

今日は，お忙しい中，長時間にわたって先生方から意義深いお話しを聞かせて頂き，私も大変勉強させてもらいました。誠にありがとうございます。これで，今回の座談会は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました！